



# 営農情報

第68号 平成30年 2月2日

## 「あまおう」2月の管理

南筑後普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

### 1 生育状況

昨年12月以降、気温が低く寡日照で推移しており、平年より生育がおくれ、1番果房の着果負担により草勢が弱くなっているほ場が見られます。また、2番果房については出蕾以降生育が鈍い状況にあり、一部で収穫が始まっていますが、ほ場間でのバラつきも見られることから、収穫のピークは2月中下旬頃となる見込みです。3番果房は出蕾から、着果始めとなっており、平年に比べ、バラつきが少ない状況です。

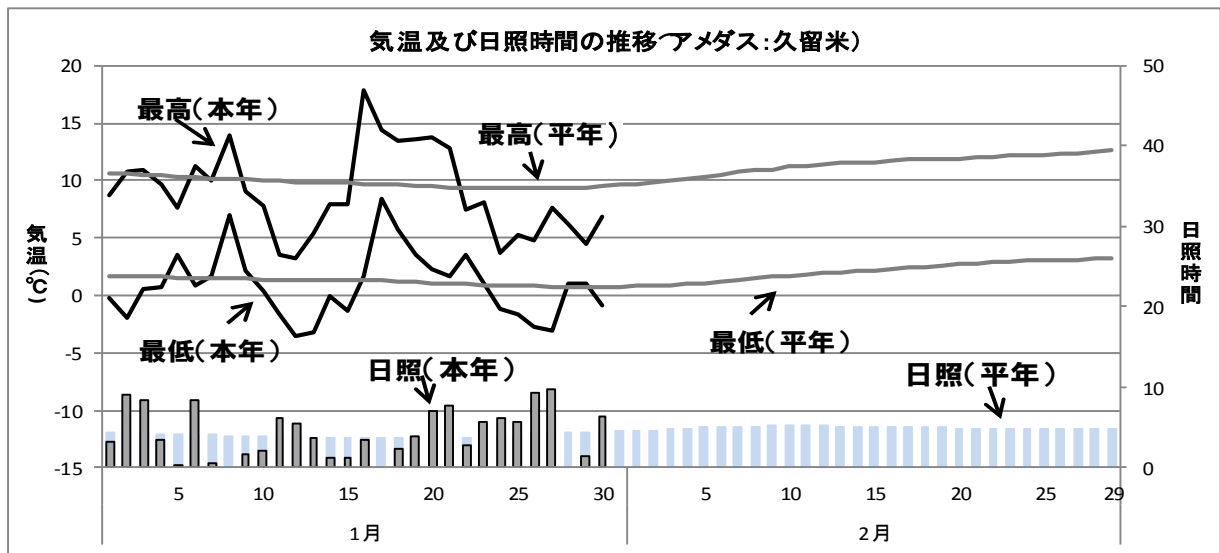


図1 気象データ(アメダス大牟田より)

### 2 気象予報と今後の見通し

#### (1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

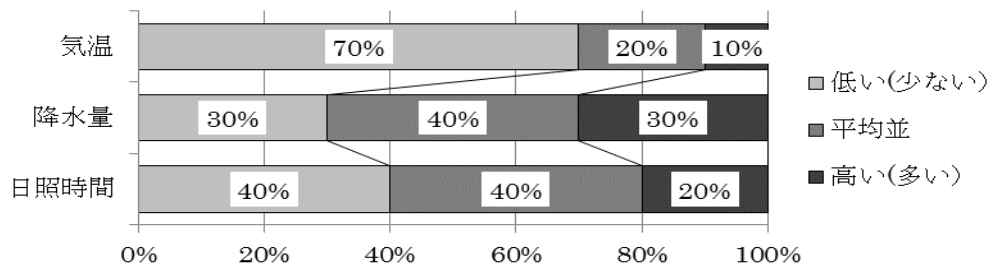


図2 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 1月27日~2月26日 発表日1月25日)

#### (2) 今後の見通し

1ヶ月予報では、平年に比べ曇りや雨または雪の日が多く、平均気温は低い確率が70%です。しかし、2月中旬以降は寒が緩みやすくなる時期でもあるため、株が急に立ち上がらないよう早勢管理に注意しましょう。

### 3 今後の管理

#### <ポイント>

#### 2番果房の肥大促進、3番果房の早期出蕾、開花促進を図る！

- ・ 2月上旬以降は、暖かい日があるので、電照・温度管理（換気）等で急激な草勢変化をさせない！（食味低下、障害果の原因となるため）
- ・ 親株の炭そ病対策を開始する。

#### (1) 温度管理

- ・ 3番果房が開花するまでは、生育促進のため高めの温度管理とする。
- ・ 3番果房の開花後は、果実品質向上のため低めの温度管理とする。
- ・ 曇雨天日が連続する場合は、換気を重視し、低めの温度管理を行う。
- ・ 「灰色かび病」対策のため、日中は換気や循環扇により湿度を下げる。
- ・ 気温の上昇に合わせてハウスサイドの換気を行えるように準備する。

表1 温度管理の目安

生育ステージ	昼間	夜間
3番果房開花前	24～28℃	5～7℃
3番果房開花後	20～24℃	5～7℃

#### (2) 電照管理

- ・ 基本的に2月末から3月上旬で終了するが、草勢、着果負担、天候などに応じて、点灯時間を調整する。（2、3番の着果負担に注意）
- ・ 株が立ち上がりそうな場合は、電照か温度を下げる。
- ・ 電照時間は、柔らかい心葉が伸び上がり始めたら徐々に短くする（2月上旬頃から）。

#### (3) かん水

- ・ 徐々に日射量が増加するので、かん水間隔を短くする。
- ・ 地温を下げないように、晴天日の午前中にかん水する。
- ・ かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝の葉つゆ状況を適湿状況の目安とする）。
- ・ 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

#### (4) 施肥

- ・ 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10aを2～3回に分けて施用する。
- ・ 液肥は、株が弱らないよう定期的に施用する。しかし、株が旺盛な場合は、春先に急激に立ち上げる原因になるため、液肥の施用を減らす。
- ・ 毎年、3月以降に先青果が発生しやすい場合は、液肥の施用を控える。

#### (5) 株整理

- ・ 収穫が終了した果梗枝は収穫量の少ないうちに早めに除去する。果梗枝が残っていると、3番果房の出蕾抑制及び果実キズの発生、果梗枝折れの原因にもなるので注意する。
- ・ 無駄な養分を使わないように、ランナーやどろ芽は除去する。 （裏面へつづく）

- 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- 葉陰などで果実に光が当たらないと、黄種果が多くなるため玉出しを行う。

## (6) 摘果

2番果房の摘果は、3番果房の出蕾を確認し、労働力や草勢、着果負担、果梗の形に応じて摘果を行いましょう。

- 3番果房が連続している場合、2番果房は強めに摘果する。逆に3番果房が遅れている場合は、連続して収穫できるよう果数を多めに残すようにする。

### 【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗：	3果/枝
かんざし果梗：	6~8果/枝

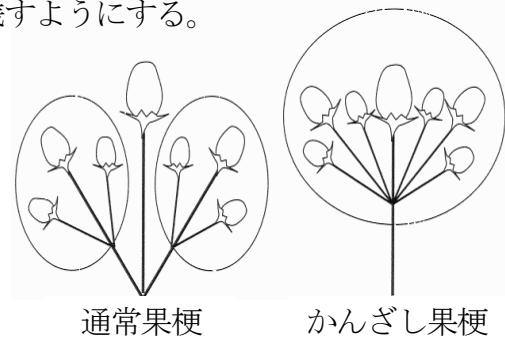


図3 果梗形状に応じた摘果

## (7) 果実品質向上対策

- 急激な株の立ち上がりは「食味低下」、「果実の肥大不足」、「障害果」の原因となるため、電照・温度管理等で適正草勢を保つ。
- 果実付近の通風が悪くなる場合は、病害や果実への「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い果実付近の通風を確保する。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は速やかに低温の場所へ移す。

## (8) 病虫害防除

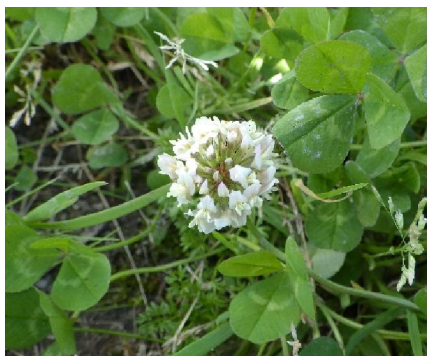
### ① ハダニ類

- ナミハダニは薬剤抵抗性が最も発達しやすい害虫のため、同じ系統の薬剤を連用しない。
- 下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ハダニの多発した株は、強めに葉かぎをした後に防除をする。
- 葉かきしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- 気門封鎖型薬剤は卵に対する効果がほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は複数回（2～3回）5～7日おきに散布を行う。

### ② アザミウマ類（スリップス）

- 年内にハウス内で産卵していることがあり、2月頃より活動し始めるため早めに予防散布する。
- 発生が確認された場合、すぐに防除する。
- ハダニ類の天敵を導入しているほ場では、アザミウマ類が多発する前にIGR剤等、天敵に影響の少ない農薬で初発防除に努める。
- ハウスの換気時間が長くなると、外部から飛び込む可能性が増加するため、サイド側や妻面付近の株に注意する。
- ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。

＜ハウス周辺でアザミウマ類の発生源になる雑草＞



シロツメクサ



キツネノボタン



キツネノボタンの花に寄生するスリップス

- ③ うどんこ病
  - ・ 3月以降に多発させないように、予防散布と早期発見が重要である。
  - ・ 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。
- ④ 灰色かび病
  - ・ 曇雨天の前などの発生を想定し、予防的な薬剤散布を行う。
  - ・ 発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。
  - ・ 特に、窒素過多で徒長気味の株では発生しやすいので注意する。

## 特集「親株の炭そ病対策も忘れずに」

ここ数年炭そ病が発生しています。そのため、現在定植されている親株も、炭そ病菌に潜在感染している株が多いことが予想されます。

来年度作でも炭そ病が発生させないために、親株の管理から対策を始めましょう。

### 1 ポイント～下葉除去と2月からの予防～

- ・ 炭そ病菌は15℃以上で孢子が発芽します。感染源になる古葉は2月中に除去しましょう。
- ・ 心葉が動き出す前から予防散布を開始して、心葉への感染を抑えましょう（下表参照）。

### 2 炭そ病を中心とした防除スケジュール（例）

2月中旬	（古葉除去） キノドーフロアブル	500～800倍
2月下旬	アントラコール顆粒水和剤	500倍
3月上旬	ゲッター水和剤	1000倍
3月中旬	ベルコート水和剤	1000倍
3月下旬	アントラコール顆粒水和剤	500倍

定期的に炭そ病の防除が出来るように6月のさしポット、すけポットの切り離しまでの防除計画を立てましょう。

**散布後は必ず散布器具(タンク等)の洗浄と防除履歴の記帳!**

**農薬の登録使用基準を遵守しましょう!**